

# 観音信仰にみる近世的感受性

——その中国における物語の分析——

川 田 耕

## 1 はじめに

雲南省昆明で記録された「観音廟」と題された民間伝承に次のような一節がある。

観音は男性の形象であつたが、徐々に女性の形象に変化していった。武則天が権力を握ってから、男の観音は女の造形に変わり、次第に母性の神となり、ついで母性の神から生育の神に変わったそ<sup>(1)</sup>うだ。

武則天云々はともかくとして、ここで民間伝承らしからぬ端的さで語られているように、中国において観音の形象は二千年近い時の流れのなかで、いわゆる「女性化」に留まらないほど、大きく変貌してきた。

周知のように、そもそも観世音菩薩は古代インドに有力な起源をもち、とくに紀元一、二世紀ころにインド

で成立したとされる『法華經』にその偉大な力が喧伝されてから信仰が高まった。漢代に仏教が伝来した中国では、観音信仰は魏晉南北朝に広がりだし、なかでも千手千眼観音の信仰は唐代から宋代にかけて大いに盛んになった。「あらゆる方角に顔を向けたほとけ」<sup>(2)</sup>と『法華經』で語られているように、観音は、救済するべき相手によってその身を三十三種に変化し、人がその名を唱えるだけでその音を感じ取って人を救う、などとされた。とくに本来救済されないといわれていたはずの女たちを救い子宝をもたすともされ、時に菩薩自身が女の姿に変化した。そうした背景もあって、観音は、あらゆる人を救済する仏として信仰を集め、如来や菩薩など他の仏教の高位の神格と同様に性別としては男、しかもたいていは若く凛々しい男、とされてきたにもかかわらず、かねてから詳しく研究されてきたように、中国にあつては「近世」<sup>(3)</sup>（なお、本稿では中国における「近世」とは宋代から清代とする）に入ると急速に「女性化」していく。

近世中国にあつては、観音信仰に続いて、あるいは相前後して、他の女神への信仰も次第に盛んになり、とくに宋代に福建で生まれた実在の女性を起源とする媽祖への信仰は、もっぱら海上の神として、中国南方の沿岸部を中心に広がった。他にも、臨水夫人や註生娘娘、無生老母、七星娘娘、金花夫人など、多くの女神が、どちらかといえば中国南方を中心に、新たに生み出され信仰されていくことになった。北方では南方ほど女神信仰が盛んではないようだが、山東の泰山の女神である碧霞元君（泰山娘娘、天仙聖母）は有名で、華北や東北部で熱心に信仰されてきた。今日もなお、中国文化圏の至るところにある廟にはしばしばこれらの女神が祀られていて、なお多くの信者が参拝する姿をみることができる。これらの女神は、たいいていの願い事はなんでもかなえてくれるとされるが、とくに病気を治すことや、子どもを授けることや安産、あるいは子どもの健やかな

成長など、庶民の生活・人生に密着した現世利益的なことが願われることが多い。その造形は、例えば古代ギリシアの若々しい女神たちやマリア像などとは異なり、威厳のある婦人であるのが普通で、どちらかといえば母性的な趣の強い女神になっている。そして、これらの女神たちの像はしばしば同じ廟内に祀られており、信仰の形態においても仏教・道教などの違いはとくにみられず、広い意味で道教的な民間信仰のなかで、同じような、女神的・母神的な信仰の対象になっている。

中国では、近世以前にももちろん、女神への信仰はある程度存在していた。女媧は、神話のなかで、天を補修し人を作り出した神とされ、嫦娥(姮娥)は夫を捨てて月に奔った神であり、そしてなかでも西王母は不老不死の女神として古くから信仰されてきた。こうした女神たちは様々な物語のなかに登場し今日まで語り継がれているものの、しかし、広く大衆に信仰された形跡は見当たらない。他にも后土、義和、素女などが記録に残るがやはり大衆的な人気があったわけではなさそうだ(ただし、信仰の形跡が消えていったという側面があるのかもれない)。仏教・道教のいずれにおいても近世以前に信仰を集めたのはもっぱら男の神であったし、儒教は一貫していかなる女性的形象にも敬意を払わなかった。<sup>(4)</sup>ところが、全国規模での集権化が進んでいく宋代に入ると、社会のシステム化がすすみ儒教が力をもち男尊女卑がすすむなかで、新しいタイプの物語・芸能が多く生まれるとともに、様々な女神信仰の萌芽がみられ、明代以降の興隆につながっていく。そのような女神信仰の嚆矢にしてもっとも有力な母型となったのが観音信仰なのである。

ちなみに、遠くヨーロッパにおけるマリア信仰には、時期的にも内容的にも、この近世中国における女神信仰の興隆と奇妙なほどの平行関係がみられる。女神マリアもまた、時代が下るとともにカトリック地域におい

て、本来の男性的な聖なる存在(キリスト、神)への信仰に対抗するかのようになり、公式的な教義に反して民衆レベルで次第に広く信仰を集めるようになった。そしてマリアもまた、処女なる女神であり(妙善も媽祖も臨水夫人もみな処女である)、しばしば海の神であり(媽祖は元來海の神であり、観音もしばしば海難を救う)、子を授け守る神となった。

それにしても、なぜ観音は、男から女へ、さらには母の形象へと変貌していったのだろうか。海を隔てた日本列島にあつては、女神信仰はずっと細々としたものにすぎず、飛鳥時代には伝来していた観音も基本的には男性であつてなかなか女性化しなかつた。<sup>(5)</sup>それなのになぜ、近世中国ではそれまでの様々な信仰を押し退けて、観音をはじめとする女神への信仰が著しく盛んになったのだろうか。そもそも、ひざまづいて祈りを捧げる対象が、男の神ではなく、女の神であるならば、そこにはどのような心情が託されているのだろうか。そのような信仰のかたちの変化の背後には、どんな社会的・文化的・精神的な変容があるのだろうか……本稿では、そうした問題意識を抱きつつ、近世中国において女神への信仰が盛んになった理由の一端を、観世音菩薩の代表的な前世譚である〈妙善説話〉(本稿では、様々に変異していく一連の物語の総体をへ)で括って表記する)の内容の分析とその歴史的变化を跡付けることを主たる手段として、精神的・歴史社会学的に探求しようとするものである。

〈妙善説話〉は、宋代において観音信仰の拠点の一つであつた香山(河南省)において生まれた。その後、宋の首都開封が金人に落とされ、南宋の首都が杭州になったことにともなつて、観音信仰の中心地は杭州の上天竺寺に移るが、それでもこの説話は語り継がれる。元朝を経て明代に入ると、観音信仰は舟山群島の普陀山を

もう一つを中心としてさらに発展するが、その間も《妙善説話》は様々なヴァリエーションを生み出しながら語り継がれていく。こうした観音信仰の興隆にあつては、《妙善説話》、なかでも『香山宝巻』とよばれる物語の力によるところが大きかったとされる。中国の観音信仰の先駆的研究者である塚本善隆は、「いったい、何が明・清の大衆社会に、かくまで女身観音の信仰を普及せしめたのであろう」と自問して、それは、「家庭の經典或は大衆的読物としてのみならず、僧尼の通俗説教や、宝巻を語る専門職業人(宣卷的)や、また絵説き式の絵画や演劇によつてさえも、つまり耳からも目からも普及せしめられたシナ製の観音伝物語、仏教的にいえば観音本生譚<sup>(6)</sup>」によつてである、としている。

長い時代にわたり広域的でもある観音信仰については、教義・教団・伝播地域・信徒の属性など様々な角度から研究されるべきものであるが、本稿では、《妙善説話》、なかでも『香山宝巻』を分析することを主たる手段として、観音信仰のなかに現れた近世的な感受性のありようを、集権化し文明化していく社会的状況と重ね合わせながら、理解しようとするものである。《妙善説話》については、これまではもっぱら仏教文化・文学の文脈のなかで研究されてきており、こうした社会的・精神史的問題意識からの分析的研究は存在しない。もしも、この独自の探求がうまくいくならば、近世中国における民衆の感受性の一端を知ることでもできようし、さらに中国における自生的な近代性の一側面を理解する端緒にもなることが期待できるだろう。

## 2 妙善説話の紹介

### (1) 原話の発生

一般的に、中国であれどの地域であれ、前近代に生まれた物語はそれがどのようにして生まれたのかはつきりしないのが普通だが、《妙善説話》の誕生は研究によって例外的にかなり明確に判明している。《妙善説話》が生まれたのは、一一〇〇年で、香山寺の僧懷晝が、道宣作とする原作を無名の僧から託されて、それを汝州知事であった文人蔣之奇に書き直してもらって、それを蔡京なる当時の皇帝徽宗の寵臣が揮毫して香山に石碑が建てられたという。<sup>(7)</sup>それは、「大悲菩薩伝碑文」とされる全文三千字を超えるもので、記録に残るかぎり、最初の妙善説話である。この最初の物語の作製の意図は、観音の由来を説くことによって、すでに千手千眼観音像で有名であった香山の観音の聖地としての価値をさらに高めることであつたのであろうが、香山の宣伝を離れて、後の《妙善説話》の発展の起点ともなった。ここでは紙幅の関係でその内容を詳しくは紹介できないが、大まかにいえば次のような話である。

ある王国に莊王という名の王がいて、その夫人の名は宝徳であつた。三人の娘がいて、妙顔、妙音、妙善といった。妙善が生まれるときには様々な奇瑞があつて、国の人々は聖人が誕生すると言つた。長じると妙善はたいへん慎ましい生活をするようになり、仏の心をもっていると云われた。王は結婚するように

迫ったが、妙善はこの世の儚さを語って、出家して俗世を離れることを願った。尼寺にやられそこで様々な苦難を強いられたが、妙善は志を変えることはなかった。そのため怒った王は兵を送り寺を燃やし五百人の尼たちを殺害し妙善をも殺そうとした。しかし妙善は神的な力のおかげで助かり、香山で修行することになった。そののち、王は病に倒れ、どんな医者にも治せなかった。怒ったことのない人の目と手によってのみ治すことができ、香山の隠者であればその目と手を捧げるであろうと、王はきいた。そこで、王が使者をやって頼ませたところ、隠者は、三宝を敬うように王に伝えてほしいと依頼したうえで、自ら両眼をえぐりとり、使者に両手を切りとらせた。王がそれを食べると病は忽ち癒えた。王と夫人が感謝の意を伝えるべく香山の隠者を訪ねたところ、隠者とはまぎれもなく娘の妙善であった。妙善は千手千眼観音となり、王は仏法への帰依を誓った。<sup>(8)</sup>

この説話はかなり独創性が豊かで完成度も高いが、完全にオリジナルなものではなく、材料になったと思われるいくつかの物語の存在が指摘されている。第一に、宋代には広く読まれていたという『法華経』の次の話である。すなわち、「外道」である婆羅門を信仰していた妙莊嚴王とその王妃淨徳が、二人の息子のすすめにしたがって出家した、という話である。また、仏典には、菩薩が求められるままに目や他の体の部位を犠牲に供するといった物語はわりと多くみられるようで、例えば『経律異相』（南朝梁の宝唱により編纂）には当時広く知られていたらしい忍辱太子の説話があって、全体のプロットも〈妙善説話〉によく似ている。病の王を救うために、自らの両眼と骨髓とを提供して死んだ、怒ったことのないという太子の話である。<sup>(9)</sup> また、三姉妹の末

娘が活躍するというプロットには、後にもふれるように、民間伝承的なものの影響が推測される。そうした材料を活用しながらも、女の主人公が父のために自分の眼と手を提供して仏になる、というメインのプロットそのものは、残された情報の範囲で判断すれば、相応のオリジナリティがあつて、《妙善説話》の原話といつてよいだろう。

## (2) 『香山宝卷』の成立

のちに続く《妙善説話》はもっぱらこの「大悲菩薩伝碑文」から派生したものと思われるが、次第に委曲を尽くし長くなつていく傾向がみられる。なかでも、おそらくは明初には成立していたとされる『香山宝卷』と一般によばれるものが、数ある《妙善説話》のなかでもとくに重要である。なぜなら、それはドラマとしての完成度が高く、「最も普及する宝卷の一である」とされ、後の時代の《妙善説話》への影響も最も大きいからである。『香山宝卷』は、今日残る最も古い版でも乾隆版であるが、この乾隆版は、『香山宝卷』のほぼ原型に近いすがたを伝えるもの<sup>(11)</sup>とされる。なお、「宝卷」とは、明代から清代にかけて盛んであつた一種の宗教的芸能で、芸人が節付きの韻文と通常の語りとを織り交ぜながら、仏教的な教理・説話を歌い語つたもので、宝卷を語り聴いたのは主に女性であつたという<sup>(12)</sup>。

この『香山宝卷』は広く語り聴かれて、主にこれに基づいてさらに多くの《妙善説話》が生み出された。主要なものとして、明代に書かれ広く読まれた小説『南海観音全伝』、明代の伝奇戯曲『香山記』、明末清初の作家による伝奇『海潮音』、京劇の『大香山』、あるいは清代の新興教派経典である『観音済度本願真経』などが



ある。とくに、京劇の『大香山』（別名『観音出家』など）は清代には非常に流行し、これを専門に演じる者が多くいたという。粵劇や越劇には『観音得道』もあって、〈妙善説話〉から派生したもの<sup>(13)</sup>のようだ。

(3) 『香山宝卷』の概要<sup>(14)</sup>

迦葉仏のおられたころ、須弥山の西に興林という国があった。時の年号は妙莊で、婆伽という名の皇帝が万民を治めていた。この国は十万八千里の広さを持ち周囲三千里の宮城があって、大いに栄えていた。妃たちの誰からも太子が生まれないことだけが憂いであった。

皇后の宝徳と皇帝が天に祈りを捧げたところ、妙莊八年に長女の妙書が、十三年に次女の妙音が誕生した。皇后が男子が生まれるように再び祈ったところ、玉帝に招かれて天の宮殿に登る、という夢を見た。その夢は皇后が仏の母になる知らせなのだと夢解きの男が告げ、十八年の二月十九日に女兒が生まれ、妙善となづけられた。天が降した子として、皇帝と皇后は宝のように大切に育てた。

妙善は、十歳で琴や書に通じ、謙虚、孝行で慈悲心の豊かな子になり、さらに御経を読み座禅をするようになった。十九歳になると、皇宮を捨て家族から離れて仏門に入って仏となって衆生を救いたいと思うようになった。

太子は結局生まれなかったので、皇帝は仕方なく三人の皇女に婿をとらせて後継ぎにしようとした。妙書は文に秀でた男を婿とし、妙音は武に優れた男を婿とすることになった。ところが、妙善は、どんな栄華にも終わりはあり、誰も死の運命から逃れられないのだから、自分は後世を願ひ仏門に入りたいと言っ

て、結婚を拒否した。父皇は怒って妙善を説得しようとしたが、妙善は繰り返しの世の無常を説いて、どんな男にもこの身を任せることはないと言つて、結婚を受け入れなかった。いよいよ激昂した皇帝は、妙善を宮廷の後園に閉じ込めて、凍えて飢えて死ぬのを待った。

皇后は娘のことを思つて夜も寝られず、皇帝に許しを求めた。そこで皇帝は娘を許そうと女官たちを引き連れて妙善に会いにいつて涙ながらに説得したが、それでも妙善は、人の世は儚いので仏門に入りたいと言い張った。母や姉たちも、宮中での暮らしの楽しさを熱心に説き、朝臣たちも父母に逆らう汚名は万世に残ると諫めたが、妙善はなお、宮中の幸福は長くは続かず死の運命を避けがたいなどと言つて譲らず、汝州龍樹県の白雀禪寺に入つて修行したいと言った。

皇帝は白雀寺の長老に対して妙善を宮中に帰るよう説得せよと密かに命じ、さもなくば寺を焼きはらうと脅したうえで、妙善を送り出した。妙善は文武の官たちに見送られて宮中を去り、寺に入った。長老は妙善公主一人のために五百人の尼僧が苦しみを受けるわけにはいかないと、公主が寺を出て行くようにあれこれと苦しい仕事をさせるが、公主はめげず苦役をこなした。長老はさらに苦役を強いるが、様子をみていた上帝玉皇が使者を發してこっそりと手助けをさせたので、公主はどんな苦役も楽々とこなしてしまつた。

妙善が頑なに帰ろうとしないことを知った皇帝は、ますます怒り、妙善は鬼怪妖言だと罵つて、軍兵を發して寺を焼きつくそうとした。そこで公主は尼僧たちを救うべく三世の諸仏に祈り、自らの口中を刺して血を空に噴き上げると、紅い涙が雨のように降り注いで寺は焼けなかった。尼僧たちは喜び公主が凡人

ではないことを知った。軍兵たちは公主は妖精であると朝廷に報告した。皇帝はますます憤怒して、もう一度軍兵を送り、とうとう妙善を捉えて、裸にして晒し者にしてしまった。皇后や二人の姉たちが嘆き悲しみ、妙善に反省を何度も促すが、妙善は頑なに拒絶し、かえって、家さえ治められないのにどうして国家を治められようかと父皇を非難する。父皇は、とうとう妙善を斬首させようとするが、上帝に守られていたのでその首は落ちなかった。しかし、妙善はこれ以上父と争いたくないと願って、とうとう絞首されてしまった。

すると、突然雷が響き強風が吹き地が揺れて、一頭の虎が現れて、公主の遺体を運び去って森の中に消えていった。気がつくと、公主は幽冥にいた。公主は地獄巡りをして、様々な地獄で苦しむ人々の姿を見たが、そのなかには白雀寺の尼僧たちもいる。公主が御経を唱えて彼らを次々と超度してしまうので、閻魔大王は公主を地上に返すことにした。

公主は上帝から遣わされた虎に乗って、惠州澄心県の香山の懸崖洞にたどりつき、そこで修行に打ち込んだ。瞬く間に九年がすぎ、公主は大いに悟りを開いた。

一方、上帝は、皇帝の悪事を知って五瘟の使者を送った。そのため皇帝はたちまち重い病となって全身がただれ腐り始め、どんな医者も治せなくなってしまった。香山の公主は仏眼でもって父皇の病気を知り、老僧に変化して王宮に赴いた。そして、皇帝の病を治すためには、一度も怒ったことのない人の手と眼が必要であり、その手と眼を与えてくれる仙人が惠州の香山にいると告げた。

皇帝は大いに喜んで、使者を香山にやったところ、仙人が白衣をきて端座していた。事情を話して請う

と、仙人はすぐに許可したので、使者は刀で仙人の左の手と左の眼をえぐりとった。使者はすぐに京に戻り、皇帝が左手と左眼を煎じて飲んだところ、皇帝の左半身が回復した。老僧によれば、右の手眼も必要だということなので、もう一度使者を香山に派遣して請うた。すると、仙人はまたもすぐに許したので、今度は使者はその右手と右目を刀でえぐりとった。かくして、皇帝の病は完治したのである。

皇帝は、皇后と娘夫婦たちと軍兵と諸官を引き連れて自ら香山にお礼にいった。皇后は、手も眼もない仙人をみて、その人が自分の娘の妙善であることを悟った。皇妃たちと文官も軍兵たちもみな、うちそろって跪き、皇帝は仙人の足を抱き、皇后は仙人の頭を抱いて、その手と眼を舐めた。すると、妙善は元の美しい姿となり、天地が揺れ動いて諸仏が現れて、皇后と妙善とは抱きあって泣いた。

大いに非を悔いた皇帝と皇后たち一族は、国を譲って仏道に励み、浄土にいくことになった。そして、妙善は世尊仏の導きによって、千手千眼観世音菩薩となった。

### 3 妙善説話の分析

#### (1) 自己主張の物語

この『香山宝卷』を一読して印象に残るのは、妙善が全編にわたって自分の意思を貫き続ける、ということだろう。妙善は、男ではなく女で、母ではなく娘で、しかも末娘であるにもかかわらず、誰よりも激しく自己主張して、誰にも一切譲らない。妙善は、一見したところ生真面目で貞潔な親孝行娘のようであるが、にもか

らず、父皇の命令も、母後の懇願も、姉たちの諭しも、すべて受け入れず、ひたすら己の道を行こうとする。そのような誇り高い意思の強さが、この物語の主人公の最も目立つ特徴であって、そのように自己主張の激しい女は、近世以前の物語のなかにはまったくみられない。夫を捨てて月に奔った嫦娥、涙で長城を崩壊させた孟姜女、詩人と駆け落ちした卓文君、老いた父に代わって出陣した木蘭などは、それぞれに多かれ少なかれ自分の意志を貫いたヒロインではあるが、妙善のように、自分の正しさを訴え続け信じるまま行動するような激しい自己主張はみられない。

妙善の強い意志は、何より結婚の拒否という行動になって表れている。中国では結婚は女たちにとってほとんど唯一の生きる道として強いられてきたものであったが、よく知られるように、とくに明清時代には儒教的な道徳的規制のなかで、夫への貞節を守るために命を犠牲にする生き方が「烈婦」とか「烈女」などと称揚されるほど、窮屈で抑圧的な結婚生活を多くの女性に余儀なくされた。<sup>(15)</sup>したがって、そのような社会的現実の中で生きていた女性たちにとって、結婚の拒否とは、当時の社会道徳・権力への挑戦であり反逆的な行為であったに違いない。物語のなかでも、結婚を拒否する妙善にたいして家臣が端的に「父母に従わないのは倫理を踏みにじるもので、万世に不幸者として名を残します」と言って強く批判している。にもかかわらず、妙善は、父皇の激しい脅しにも怯まずに、「黄泉の路に情はなく三塗地獄は恐ろしいところですから、私は人の嫁になどなりません」などと言って明快に結婚を拒否している。元来の「大悲菩薩伝碑文」よりも『香山宝卷』の方がこの結婚拒否のモチーフが繰り返されており、緊張感は強いが痛快でもあるモチーフとして歓迎されたものと思われる。妙善が拒否するのが普通の結婚ではなく、次代の王との結婚ということも、社会的な反逆性と痛

快感をいっそう高めたであろう。

『香山宝卷』が結婚を拒否する独身主義の物語として女たちに受け入れられていたことを示す有名な事例がある。二十世紀初めごろに、広東のデルタ地帯の農村の女性たちが結婚を拒否して女たちだけで暮らそうという動きが盛んになったが（金蘭会の名で知られている）、そのさい女たちは『香山宝卷』をはじめとする女人成道の物語を所持して精神的な支えとしていた、という<sup>(16)</sup>。女たちにとって、〈妙善説話〉は、何よりも結婚を拒否する、誇り高い女の自己主張・自己決定の物語として生き続けていたのだと思われる。

結婚の拒否をはじめとする激しい自己主張は、現実には当時の女性たちにとって反社会的な許されざる行動であつたにもかかわらず、物語のなかでそれが必ずしも不自然ではないのは、妙善が特別な聖なる存在として生まれた、という物語上の設定があることが一因としてあげられる。妙善は、母后が「上蒼」(天)に祈って玉帝が皇后に授けたもので将来は仏になる、とされている。子がない夫婦が神仏に祈って子を授かる、という出だしは中国(や多くの地域)の神話や民間伝承によくあるパターンで、そのことで、主人公が世俗を超えた聖なる存在であることが示され、また主人公に同一化する享受者たちの自己愛をくすぐるのだと思われる。妙善はしかも、姉たちの凡庸さと対比されながら美しさと徳の高さをうたわれて、その存在が特別なものであることはますます明らかである。それゆえに、妙善が、元来は許されないはずの自己主張をすることが物語的に可能なことになるわけである。

〈妙善説話〉が発展していく明代になると、妙善のように、かなり強く自己主張をする女たちが物語のなかに次第に多く出現するようになってくるのであって、その代表として、明代から清代にかけて発展する〈白蛇

伝』の白娘子や晩明の『金瓶梅』の潘金蓮などをあげることができる。近世において集権的で父権的な社会システムが発展していくなかで、社会システムのなかで下位に位置付けられ差別されているはずの女が、天に選ばれ美しくも激しい意志の人として社会的慣習と権力に逆らって大いに自己主張し大活躍する、という〈妙善説話〉は、女の享受者たちにとって切実かつ痛快な物語であって、女たちの自己主張の物語の最も有力な先駆になったと思われる。

## (2) ルサンチマンの逆転

妙善は、かく激しく反逆的なまでに自己主張をするのだが、分析的にみると、それは必ずしも直接的な行動によるものではなく、むしろニーチェのいう意味で「ルサンチマン」(怨恨)に行われていることがわかる。ニーチェのいうルサンチマンとは、加害者にたいする直接的な反対行動ができずに空想的に復讐することによって被害の埋め合わせをしようとする心情である。この空想的な復讐とは、しばしば道德的に自己を正当化し相手を貶めるという手段で達成されるのであって、具体的には「返報をしない無力さは『善さ』に変えられ、臆病な卑劣さは『謙虚』に変えられ、憎む相手に対する服従は『恭順』<sup>(17)</sup>に変えられたりするのである。つまり、ルサンチマンとは、弱者による強者への道德による一揆なのである。

『香山宝卷』にあっても、反逆は直接的な行動によるわけではない。妙善が直接的に反抗するというのであれば、父皇にたいして暴力を用いたり暴言を吐いたりということが考えられるが、妙善はむしろそんなことはない。『香山宝卷』にあっては、そうではなく、弱い立場にある女・娘が、強い立場にある男・父に、道德

的に反抗するという形態をとるので、ルサンチマン的なものである。この場合の道德とは、具体的には仏教的なものである。儚い世にある自分自身と父母や衆生たちの後世のため、という宗教的な建前を前面に押し立てながら、父皇や母后や姉たちの生き方を虚しいものと散々に非難を重ね、彼らの命令や希望や想いに逆らうのである。結婚の拒否という中心的反逆も、それが仏の教えに反する欲深いものだから、という建前にそって行われる。

もつとも、妙善の仏教的な主張は、物語のなかで必ずしも十分に説得的ではない。妙善は、ひたすら死後のことを思えというばかりで、母や姉たちによる、辛い出家の生活など捨てて宮中で安楽な暮らしを楽しもう、などといった世俗的幸福を勧める論しの方がよりまっとうなようにも響く。父皇や家臣たちのいう儒教的な孝行の道を守るのが人の道だという主張も当時の人にはある程度の説得力があっただろう。いずれの主張が正しいかはつきりしないままそれぞれが主張しあつて平行線をたどるなか、妙善が父皇たちに物理的に次第に追い詰められていくことで、『香山宝卷』にはドラマとしての強い緊張感が生れる。このような緊張感は、香山の宣伝という要素の強い「大悲菩薩伝碑文」にはあまりみられず妙善の正しさは明らかであるが、『香山宝卷』では、緊張を保ったままドラマは終盤近くまで至り、最後には逆転を果たして、父皇や母・姉たちは妙善の正しさを思い知らされ大いに悔いて行いを改める。

このようなルサンチマン的な逆転劇は、近世の中国の物語に広くみられ、それゆえにこうした劇は一種の「時代精神」を表したものののだと思われる。例えば、元雜劇の代表的な悲劇である『寶娥怨』や近世に広く親まれた〈包公伝説〉などは、悪人に騙されて刑死した(あるいはされそうになった)庶民が、幽鬼になって復讐



したり、清官の名裁きで救われたりする物語であって、やはり一種のルサンチマン的逆転劇であるといえるだろう。あるいは、宋代に生まれ明代に発達した《三国志》は、軍事的強者である曹操らに対して、軍事的な弱者である玄德・孔明らが、皇統上の正当性と知略でもって逆転を目指して抵抗する物語であって、そこにはやはりある種のルサンチマン性がうかがえる。

我々のこれまでの研究によれば、こうしたルサンチマン的心情の背後には、近世中国における集権的国家秩序の形成と強化があつたのであつて、ごく大雑把にいうならば、次のような社会的・精神的な機制が働いてゐたと思われる。すなわち、一般的に、社会が集権化の力学のなかで国家化していくと、人々の「超自我」が強まり、両親の教えや社会からの要請に忠実に応えようとする強迫が高まり、社会全体が文明化していく傾向がみられる。中国にあつても、「近世」にいたると、貴族の没落等を背景として、皇帝を頂点とする中央集権的な国家が形成され、その支配を貫徹すべく官僚制が発達する。すると、それに応じた一元的で権威的なイデオロギー、すなわち宋学が形成され汎化していくとともに、一般の人々の心性も変化し、民衆的な物語においても、主人公たちはそれまでの時代にくらべて、より道徳的で強迫的な人間として描かれるようになる。一方では社会的な道徳を遵守しようとする強迫性が産まれながら（つまり、超自我的な機能が強くなっていく）、他方ではそれに反抗しようとするルサンチマンを無意識的に溜め込むようになり精神が多層化していく、というわけである。<sup>(18)</sup> こうした我々の研究と類似した見方を示す先行研究は中国社会を舞台にしたものとしては見当たらないが、『香山宝卷』を翻訳したウィルト・イデマは、「妙善伝説」と「目連伝説」を論じる文脈で次のように言っている。「中国社会においてあらゆるレベルで父権的な家族が確立されてはじめて、これらの物語は巨大な重

要性をもったといえるだろう。この観点から考えて、これらの伝説が流行した説明として宋朝(九六〇～一二七八)における諸発展(父系的な組織の強化や新儒教の興隆など)を指摘することは容易である。<sup>(19)</sup>

したがって、皇帝や王といった集権的秩序の頂点に立つ人物形象は、人々の復讐劇の対象として本来最もふさわしいはずである。しかしながら、一般的には物語においては、復讐の対象は容易に置き換わって、皇帝や王といった頂点に立つ人物ではなく、もう少し下位の権力者や父親的な人物などになることが多い。近世日本においてはその傾向が顕著で、天皇や將軍は決して復讐の対象とならず、〈曾我兄弟〉における工藤祐経、〈忠臣蔵〉における吉良上野介など、「君側の奸」が復讐の具体的な対象となる。本来の恨みがその正統な対象に向かわずに、より道徳的・実効的に弱い対象に向きを変えられてしまうほど、その情念はルサンチマン的に屈折しているのである。もっとも、近世中国の物語にあつては、皇帝や王といった最高権力者がともに復讐の対象となることがしばしばあつて、〈十人兄弟〉〈百鳥衣〉などにおいては、皇帝・王は主人公たちの仇となり、最終的には殺されてしまう。<sup>(20)</sup>〈孟姜女〉もまた、殺すところまでいかないものの、始皇帝にたいして強烈に異議申し立てを行う。

〈妙善説話〉にあつても、このルサンチマン的情念の対象は直裁に「皇帝」であり、じつさい皇帝はその権能に相応しい行為に及ぶ。強大な国の皇帝であり、多くの家臣と軍兵を率い多数の妃をもち、娘に結婚を強いて、怒りにまかせて寺と尼僧たちを焼き払い、最後には娘を絞首する。そのような、いわば絶対者としての皇帝にたいして、妙善は挑戦し反抗するのであるが、物語ではそれは、〈十人兄弟〉や〈百鳥衣〉のように物理的暴力によって遂行されるのではなく、道徳的に行われるのであつて、だからこそルサンチマン的なのである。

その逆転は、何度も執拗に行われ、例えば、皇后の嘆願を聞き入れて父皇がわざわざ自ら花園に妙善を迎えに行き涙ながらに説得しながら拒絶される、というプロットにおいては、道徳的な逆転ばかりではなく、感情的にも妙善が逆転し優位にたっている。終盤で、妙善が老僧に変じて病魔に苦しむ父皇のもとにやってくるプロットもそうであって、何も知らない無力な父親をすべてお見通しの妙善が救うのであるから、妙善はもはや道徳的にも知的にも身体的にも、あらゆる面で父皇に優っているのである。

そして、父皇は何も知ることなく娘の身体の一部を食べてしまうのだが、これはこの物語のルサンチマン性をもっとも強く象徴している。すべてを知ったうえで自己を犠牲にする妙善にたいして、父皇は何も知らずに娘の身体を食べるという大罪を犯してしまうのである。最後には、父皇と母后と姉たちが、わざわざ香山に赴いて、無力だったはずの末の娘が千手千眼菩薩という聖なる存在にまで成り上がるさまを目撃する。もはや妙善は完全な勝者となっている。

かくして、〈妙善説話〉にあつては、父と娘、母と娘、姉と妹、大人と子ども、男と女、王と王ならざるもの、それらの力関係が一挙に逆転する。実際には、宋代以降皇帝は絶対的な存在として集権化された国家の頂点にたち、儒教的な秩序のもと、人々の間の序列化の原則が強まっていたはずである。にもかかわらず、というよりは、だからこそ、この時期の物語にはかつてなく秩序転覆的なものが増えたのであり、〈妙善説話〉もその先駆であり代表の一つなのだと考えることができるだろう。

こうした劇的な大逆転は、『香山宝卷』以降、〈妙善説話〉の発展のなかでも中心的なテーマであり続ける。例えば、『辰河高腔目連全傳』<sup>(21)</sup>では、父皇が思い通りにならず失敗するさまが繰り返し描かれて、滑稽なほど

である。父皇の失敗は相当に好まれたモチーフであるに違いない。さらには、こうした逆転が物語的に示されるだけではなく、言語的にはつきりと明示されるようになる。例えば、明代の小説『南海観音全伝』では、「世尊以来、一人だけ」(第一五回)「世尊以外、妙善だけである」(第二二回)など大いに持ちあげる。もつとも、こういう具合に妙善の卓越性を言語化してしまうと、妙善だけの特殊な逸話になってしまつて、秩序転覆的な力が失われてしまうのであつて、こうした点からは、〈妙善説話〉が長い問語り継がれるなかで、その本来の生命力がやや弱くなつていくことが見て取れる。それでもなお、この秩序転覆的な逆転が〈妙善説話〉の核心なのであつて、そのことは、例えば、一九八〇年代に舟山群島(観音信仰の本場である)で採取された、ある洗練された〈妙善説話〉にもよく現れている。三女に救われた妙莊王は、一人修行し悟りを開いて仏となつたのだが、なお金銀への執着が捨てられなかつた。そのため仏祖によつて、普陀山の道端にやられ、そこで参詣人たちに施しを受けることになり、人々はこの菩薩を「乞食菩薩」と呼んだ、という結末である。王から乞食へと見事に転落したわけである。<sup>(22)</sup>

### (3) 残虐な破壊性

同時に、〈妙善説話〉には、ルサンチマン的な逆転劇ということには収まりきれないような、残虐で破壊的な部分がある。それはなによりも、妙善の手と眼がえぐりとられる、という物語全体の中心的モチーフにある。これはどの〈妙善説話〉でも決して省略されないモチーフであり、しばしば妙善自身が自分の手と眼をえぐり取る。『香山宝卷』では、この手と眼の摘出をわざわざ、初回は左手と左目で、次の回では右手と右目、と二

回にわけていて、このモチーフの物語上の重要性を示唆している。

《妙善説話》には他にも多くの残酷な場面がある。父皇が妙善を後園に閉じ込めて凍えて飢えて死ぬのを待つ話や、父皇が寺を焼き払い尼たちを殺してしまう場面、そして妙善を裸にして晒したうえに絞首させる、という極めて残酷な場面もあり、また父皇の全身が爛れ腐り始めるというモチーフもある。どれも、ほとんどの《妙善説話》で描かれており、しばしばしつこく描写される。

親孝行の物語のはずなのに、残酷さが奇妙なほど目立つという物語は、当時の中国の親孝行譚にはよくみられる。親孝行の話をまとめた『二十四孝』（元代に成立）には、親のために命を投げ出す子の話や、親のために我が子を埋めようとする話、といったグロテスクな自己犠牲の話が多くみられる。また、妙善と同じように自分の身体の一部を親に食べさせるというモチーフも当時の中国にはしばしばみられ、宝巻には、割股（自分の腿の肉を削ぐこと）をして弱った親に食べさせるという話が十五種を数えるという。<sup>(23)</sup> また、仏典には、先にも記したように、親孝行ではなく衆生の救済が目的であるが、菩薩が自らの眼や頭を犠牲にする捨身の物語が多くみられる。《妙善説話》は、こうした物語の伝統を引き継いだ、自己犠牲的な親孝行譚の一つなのである。<sup>(24)</sup>

こうした残酷さの多くは主人公の身体の毀損として描かれ、物語は一見マゾヒスティックではある。しかし、一般的に言って、マゾヒズム的行為には、こんなにも自分は苦しんでいるだという怒りを含んだ訴えが隠されているものであり（『二十四孝』の親孝行譚にもそれは感じられるだろう）、《妙善説話》にもそうした自己憐憫的な訴えという部分はあるだろう。しかし同時に《妙善説話》では、マゾ的という言葉では収まらないような、他の物語にはみられない、よりあからさまにサディスティックな攻撃性がみられる。『香山宝巻』では、出家の意

思を変えさせようと、父皇も母后も二人の姉も延々と妙善を説得する場面が続くが、父や母の訴えが切々として人情味があるのに対して妙善の方はまったく容赦がなく、「家族を治められなくてどうして国を治められましょうか」などとしばしば無慈悲な非難の言葉を父皇にあげて動揺させたりしている。妙善の方がむしろ冷酷で攻撃的で「妙善の道心は氷のように冷たい」とされるのである。そもそも、考えてみれば、妙善という主人公こそが、すべての破壊の発端になっている。妙善が出家したいと自分の意思を貫き少しも譲らないことが、父皇や母后を困らせ、尼たちが焼死してしまう原因になる。父皇が病氣になったことも、白雀寺でのことを妙善が仏陀に語ったことが発端となっている。イデマも、『春秋』における「鄭伯克段於鄆」という、兄弟間の争いで弟の味方をした母を許す兄の物語と対比させながら、妙善において和解の志向が欠落していることを指摘している。<sup>(25)</sup>さらには、先に分析したように、この物語全体にはすべての権力的な関係性を逆転させてしまうような秩序転覆性がある。にもかかわらず、妙善のこの攻撃性・破壊性が気づかれにくく、むしろ彼女があたかも道徳的に正しいかのように受け止められるのは、妙善が玉帝の授けた特別な女であり、父皇に絞首されたうえに自ら手と眼を抉って父皇に献じる、という極端に自己犠牲的な行為を遂行するような聖なる存在である、ということが大きいだろう。

三姉妹のなかで一番親孝行なはずの末娘が実は最も破壊的な存在であった、というこの物語は、フロイトの分析するところの、シェイクスピアの『リア王』とよく似ている。<sup>(26)</sup>リア王にも三人の娘がいて、国を譲られた長女と次女は父王を裏切り追い出すが、媚びずに父を怒らせて追放された末娘コーディリアだけが困窮し放浪する父王を献身的に助けようとする。このように一見したところ末娘は正しい存在だが、フロイトは、長女・

次女は夫ともに現実的に生き残ろうとしたのにたいして、三女は父とともに死へと向かう「死の女神」なのだ、と分析している。フロイトは、よく知られているように、エロスとタナトスを対立的に考え、前者を性愛的で生産的なもの、後者を禁欲的で破壊的なものとしたのであるが、そのような意味で、コーディリアはタナトス的な死の女神なのだといえよう。妙善もまた、コーディリア同様に、正しいことを言って父皇を怒らせ追放されるが、長女や次女とは異なつて、死に瀕した父皇を文字通り献身的に救済するのであるから、一見したところ親孝行な娘である。しかしながら、その結果、父皇や母后の築いていきた生活は完全に失われることになり、出家を願うことになる。そのようにして妙善は、エロスのな快乐・幸福を自ら禁じ、自己の身体をも犠牲に供して、父や母や姉たちの人生を、さらにいえば社会一般の規範を否定し破壊しようとするのであるから、彼女は十分に「タナトス的」なのだといえるだろう。

《妙善説話》にみられるタナトス性は妙善が性的な快乐を自らに禁止するという点にもよく現れており、そのことは他の観音譚と比較すると明らかである。例えば、様々に変化する観世音菩薩のなかには、研究者が繰り返し注目してきたように、魚籠観音という誘惑的な美女に変化した観音も存在した。元来の物語としては、鎖骨菩薩という名の菩薩が世俗の欲に喜捨すべく、美女に変化して多くの男性に身を委ねて死んだ、といったものであったようだ。それが宋代あたりになると、性的な部分は改変されて、魚籠観音が馬家の許嫁となつて婚礼の日に死んで腐爛することで衆生を教化したのだ、といったより説教くさいプロットになつてゐる。<sup>(28)</sup>《目連救母》の系統の演劇にも、観音が美女となつて目連を誘惑するという段があり、《目連救母》のなかでもよく上演され好まれていたようだ。<sup>(29)</sup> そもそも古い仏典には、菩薩が衆生の教化のために女身となつて男を性的に

誘惑して交わる、といった話がしばしばみられる。<sup>(30)</sup> そのような性的な魅力をそなえた女身の観音が盛んに語られていたにもかかわらず、妙善は断固として性的なものを拒否するのである。

《妙善説話》（あるいは『リア王』）のタナトス性は、一般的な三姉妹の物語と比べてもよくわかる。中国における代表例は「蛇郎」という民間伝承で、中国全土に広がっている。蛇に婚姻を求められて、上の二人の姉は断るが、末娘が受け入れて結婚して意外にも幸せになる。ところが、妬んだ姉が妹を殺して妹のふりをして蛇と暮らす、しかし妹の生れ変わりに復讐される、といった話である。<sup>(31)</sup> 異界のものとの強いられた理不尽な結婚が、性愛的で世俗的でもある幸福に結びつくという、その意外な逆転の顛末とそこに潜む真实性が、この昔話の面白さであろう。性愛的な幸福をもって結末・結論とする、というのは民間伝承にはごく一般的であって、先に触れた《百鳥衣》や《白蛇伝》もそうである。<sup>(32)</sup> ところが、《妙善説話》では、そのような性愛的な幸福は主人公によって拒否されて、逆に身体的に自己を犠牲にして父を救おうとするのであるから、そのタナトス性はいつそう明らかである。

つまり、《妙善説話》のプロットの太筋は、ルサンチマン的な秩序転覆と逆転のドラマなのであるが、そこにタナトス的な禁欲性と残酷性がまとりついているのであって、このことにこそ、妙善説話の歴史的・精神的な意義があると思われる。<sup>(33)</sup> こうしたタナトス性の色濃い同時代の物語としては、他に《目連救母》があげられるが、この物語も、主人公が親孝行で熱心な仏教信者でありながら、その実母が地獄で激しく罰せられるさまを楽しむという残酷な趣向をもっている。物語がかくもタナトス的な暗い影を濃くするほどに、集権化され抑圧の強まった近世中国にあつては、ルサンチマン的な情動が深く溜め込まれてきたのだと推測される。



かくして、以上の分析・考察からみえてくることは、慈悲と救済の仏であるはずの観世音菩薩は、物語においては、父権的な国家における社会的秩序と家族的関係を破壊することを秘かに企てる残虐なルサンチマンの女神だった、ということである。

#### (4) 母神への昇華

こうして、妙善は、父権的な皇帝の権威を破壊し、世俗的な価値観をひっくりかえし、そのうえで初めて観音菩薩となる。観音菩薩は、この時代以降、人々の様々な願望をかなえ救済する女神として、華南を中心に中国で最も広く信仰される女神となり、「家々観世音、処々阿弥仏」とことわざでいわれるほどになる。観音信仰は、媽祖など明代以降に人気になる様々な女神信仰の母型ともなった。

観音はその普及の中で、若い女性であるとともに、母親的なイメージが強まっていく。それは、とくに子どもを授ける神として信仰されたことに現れている。近世には「送子観音」の像が広く信仰の対象になっていったのだが、これらの像はみな嬰兒を抱いている。やはり近世に信仰された「白衣大士」(やはり観音である)<sup>(34)</sup>もまた、時に嬰兒を抱いているという。十六世紀半ば以降には嬰兒を抱いた白磁製の観音像が多く作られた。<sup>(35)</sup> 広東や江蘇無錫では、近年にいたるまで子どもが観音と母子の契りを結んだり、観音を義理の母として拝む風習があつたという。

〈妙善説話〉における妙善が、あのようにルサンチマン的で破壊的であつたにもかかわらず、観音が慈悲深い母神になる、ということ、あるいは、慈悲深い母神の前世の姿として、かくも反抗的で破壊的な娘を想像し

たということは、一見したところ奇妙な現象である。しかし、ここでも、フロイトの『リア王』についての分析は示唆的である。フロイトは、「実際は強制に服属しているところで選択がなされ、選択された女性には恐るべき者ではなく、もつとも欲せられるべき最美の女性なのである」<sup>(36)</sup>といつて、死の女神であるコーディリアは必然的な死の女神なのに、それを愛の女神として反転させる点に物語のトリックがある、と考えた。運命の死があるはずのところに女神＝母による救済がある、と想像することは人類の最も深い願望であるのかもしれない。

この、死の女神から救済の母神への反転は、『妙善説話』においてすでにある程度準備され暗示されていると思われる。何よりもそれは、『妙善説話』の中心的モチーフである手と眼の犠牲にみられる。父皇の命を救うために、手と眼を与えることは、乳という自分の身体の一部(あるいはその他多くの大事なものを)を与えることで子どもを育てる母親のイメージと重なる。そもそも、病気を治し命を救うのは、母親的な営みである。そして、手と眼を失った妙善が天帝によって美しい娘に戻り観音菩薩となることは、母親の誕生あるいは再生を想像させる。妙善は、また、地獄をめぐって餓鬼たちを超度(救済)してもいるが、これもまた母親的な営みと考えることができる。妙善は、プロット上は結婚しておらず処女なのであるが、しかしその母性はすでに物語的に暗示されており、それをふまえつつ、ルサンチマン的な逆転と死神的な破壊の女神は慈悲によって人々を救済する母神へと、信仰のなかで願望充足的に反転され昇華されていったのだと思われる。

また、『香山宝卷』で注目されるのは、物語のなかで皇后が大きな役割を果たすことである。元来の「大悲菩薩伝碑文」では、皇后は時に嘆きつつもさしたる役割は果たさないが、『香山宝卷』では、皇后は常に娘の

妙善に同情的で、両手と両眼のない仙人が妙善であることを悟るのも父皇ではなく母后である。皇后は、妙善を殺そうとする夫にたいして、「母子の情はとても深いものであつて夫の怒りをも恐れません」と堂々と主張して妙善を助けようとする。皇后は「十月腹のなかで育てる苦しみ、三年乳哺する苦勞」などと子を産み育てる苦勞を語るが、これは「十月懷胎」といわれる近世中国の演劇における定番で見せ場の一つである。『香山宝卷』から派生したと思われる『観音済度本願真經』では、家のなかで低い地位しかない女性の悲しみを妙善が切々と訴えている。<sup>(37)</sup>このように、『香山宝卷』やそこから発展した『妙善説話』においては、夫と妻との関係も相対的に逆転されており、より母親への共感の強い物語となつていふことができる。父皇にはそれほど冷酷で尼僧たちの犠牲にもさほど頓着しなかつた妙善であるが、母后にはさほど冷たい言葉は投げつけない。

妙善は観音が母神へと変貌を遂げたということをふまえると、『妙善説話』は全体として、一人の少女の成長の寓話的な物語とも読める。宮中から後園に追われ白雀寺へ行き苦勞することは、親からの物理的・精神的自立の寓話であり、仏教の教えを自分のものにすることは精神的な自立を意味するであろう。しかし、普通の物語であれば、ここで異性との出会いと結びつきのテーマがでてくるはずだが、それが無いのが『妙善説話』の特徴であり、自然な成長の物語とは言い難く、やはりタナトス的な部分である。そして、決然とした自己主張と激しい反逆・破壊、そうしたことをへての成長という物語と、破壊の女神を愛と幸福の女神へと反転させたい人々の願望とがあいまつて、生きとし生けるものに慈悲をふりそぐ、万人の母としての観世音菩薩が誕生したのだと思われる。

今日の中国各地に残る、観音についての民間伝承をみると、〈妙善説話〉系統のものがやはり多いが、妙善が宮中を出たのは二人の姉のいじわるからのがれるためだ、などとして、妙善が父皇の命令に頑なに逆らったり道徳的な主張をしたりする場面があまり描かれず、結婚の拒否という肝心のテーマが消えている場合すらある。妙善が本来備えていた反逆性・破壊性といったものはある程度影を潜めているのである。もはや、人々の心のなかでは、慈悲深い母神としての観音菩薩のイメージが確立されているのだらう。<sup>(38)</sup>

なお、我々は最初に中国における観音信仰とマリア信仰の平行性を示唆したが、観音信仰の興隆の一つの発端になった〈妙善説話〉を分析すると、マリア信仰との平行性だけではなく、イエス・キリストの物語との部分的な類似性をも指摘できるだろう。妙善＝観音もキリストともに、社会的秩序への反逆者として時の権力者たちに指弾され、自己犠牲的に殺され、かつ蘇ることによって、すべての人の救世主となったのである。その後、キリスト教の一部では、男神的なキリストに代わってその母マリアが母なる神として信仰を集めるが、観音信仰の系譜にあつては、観音がそのまま苦しむ犠牲者のイメージから母親的な慈悲の女神に変容していったのである。したがって、近世中国における妙善＝観音のありようとヨーロッパの一部におけるキリストマリア信仰のありようとはやはり大まかな平行性があるといえるだらう。<sup>(39)</sup>

#### 4 おわりに

やや複雑になったここまでの議論をまとめながら、そこから示唆できることを示すならば、次のようになる

だろう。

《妙善説話》は、古い經典を利用し妙善を貞潔で信心深い美しい娘とすることで、同時代の集権的・家父長制的な国家的社会秩序とそれにとまなう超自我的な倫理性とを表面的にはなぞっている。しかしながら、父皇に背いて父皇に殺された妙善がその手と眼をえぐり取って父に捧げることで父の命を救ったとする物語には、強者にたいして道徳的に復讐するというルサンチマン的な情念とともにすべてを残酷に破壊しようとするタナトス的な志向すらもみられる。同時に、この振れた復讐劇は、王と王以外、親と子、男と女、既婚と未婚といった社会的な権力のコードを全面的に逆転させている。

同時代の他の物語などと重ね合わせて分析すると、こうした死神的ですらあるルサンチマン的な逆転劇は、集権的な国家秩序を転覆し内破していく志向をもっていると考えられる。妙善は、集権化され世俗化された俗世を駆け抜けて、死の世界へと向かうことで、このような逆転的転覆を果たすのである。かくして、死神的な破壊性をもって秩序を転覆したうえで、妙善は偉大な聖なる菩薩として崇められることになるのだが、そのさい、その元来の破壊性は願望充足的に反転されて、妙善はすべての人に救済をもたらす、処女にして万人の母としての愛の女神に変異したのである。このような神の出現は、逆に、母性的な愛情への期待をもたらし強化する作用があつて、明代以降の様々な女神信仰の先駆となつたと思われる<sup>(40)</sup>。

近世中国における観音の「女性化」はよく知られているが、その内実は初めての本格的な母親的な神の出現であつた。しかし、その出現のためには、国家的・家父長制的社会システムへのルサンチマン的な復讐と価値の転倒が必要だったのであり、そうした転覆的な物語をへてはじめて、万能で美しく愛に満ちた母神への期待

という幻想的な感受性が生み出されたのであって、それは単なる「呪術の園」(マックス・ウェーバー)の絵空事  
なのではなく、すぐれて早期近代的な現象と考えられる。

## 注

- (1) 「観音廟」『中国民間故事全書 雲南昆明・東川卷』知識産権出版社(北京)、二〇一二年、八二頁。
- (2) 坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』下巻、岩波文庫、一九六七年、二七一頁。なお、この言葉が記された、『法華経』のなかの一卷『観世音菩薩普門品』は、中国における観音信仰の最も中心的な重要な經典であり続いている。
- (3) なかでも、次に二つの著作がこのテーマに関して周到な調査と考察を重ねている。于君方(陳懷宇・姚崇新・林佩瑩訳)『観音…菩薩中国化的演變』法鼓文化(台北)、二〇〇九年、彌永信美『観音変容譚』法蔵館、二〇〇二年。後者は、慈愛に満ちた母なる女神になる以前の観音は実は、「豊麗神怪」な、ある種の恐るべきものも含み込んだ密教的な観音であって、その起源は遠く古代インドのシヴァ神話圏にある、という信仰の歴史を跡づけようとしている。
- (4) この壮大な女性観音の前史は本稿では到底扱うことができない。
- (5) 中国の女神については、以下の二冊に概説がある。過偉(君島久子監訳・新島翠・林雅子訳)『中国女神の宇宙』勉誠出版、二〇〇九年、袁珂(鈴木博訳)『中国の神話伝説』上・下巻、青土社、一九九三年。
- (5) 日本においては、古代以来一貫して女神信仰があまりみられない。一定程度の信仰を集めた女神としては、アマテラス・神功皇后・吉祥天女・弁才天・鬼子母神などをあげることができるが、いずれも中国における観音や媽祖のような長期にわたる熱心な信仰の対象にはならなかった。アマテラスが、国家神Ⅱ皇祖神として特権化されるのは、とくに明治期の権力者の思惑のためであって、一般の民衆の信仰はほとんどなかったようであるうえに、中世にはときに「男性化」していた。神功皇后への信仰は一部地域に止まり、吉祥天女が信仰されたのは平安期がピークでそののち衰微する。これらに比べると、弁才天は海の神として近世に比較的広く信仰されたものの、その信仰は中国におけ

- る観音や媽祖の比ではなく、今日では七福神の一つにすぎない。鬼子母神は、日蓮宗において子育ての神として信仰されたが、日蓮宗以外への広がりに欠ける。そして、観世音菩薩は、日本においても、奈良時代くらいから上下の階層において広く信仰され、とくに近世になると、西国三十三所参りに代表されるように盛んに信仰されたが、当時は観音は必ずしも女性とは受け止められていなかったようで、観音の性別は曖昧であり続けた。日本において観音がはつきりと女性化するのには、おそらくややく二十世紀に入ってからであろう。ただし、二十世紀以前に女性の姿をもった観音像がまったくなかったわけではない。古くは、光明皇后が十一面観音の化身とされた形跡があり、如意輪観音は平安時代くらいから女性的なイメージであったようだ。また、おそらくは中世終わり頃から信仰された子安観音は幼児を抱いた慈母の姿である。佐藤弘夫『アマテラスの変貌』法蔵館、二〇〇〇年。『観音変容譚』三二一—四頁、彌永信美「如意輪観音と女性性」『インド哲学仏教学研究』八号、二〇〇一年。
- (6) 塚本善隆「近世シナ大衆の女身観音信仰」山口博士還暦記念会編『山口博士還暦記念印度学仏教学論叢』法蔵館、一九五五年、二六五頁。引用は新字体・新仮名遣いに改めた。
- (7) Glen Dudbridge, *The Legend of Miao Shan* (revised edition), Oxford University Press, 2004.
- (8) 『観音』に全文がある。*The Legend of Miao Shan* にも全文とその英語訳がある。なお、干君方は幼いころ祖母から〈妙善説話〉を聞いたのであるが、その内容はこの碑文のものと大同小異であって、それは、一九八七年に中国の各地で信者たちから聞いた〈妙善説話〉ともよく似ていたという。『観音』三三三—三四頁。
- (9) 『観音』三四八頁、『観音変容譚』三七三—三八、四三三—四四頁。
- (10) 澤田瑞穂『増補 宝巻の研究』国書刊行会、一九七五年、一二七頁。
- (11) 吉岡義豊「乾隆版『香山宝巻』解説」『吉岡義豊著作集』第四巻、五月書房、一九八九年、一二五頁。厳密に言えば、明代以降に書かれたことを示す痕跡があり、原型そのままではない。*The Legend of Miao Shan*, pp47-56.
- (12) 『増補 宝巻の研究』など。
- (13) 『観音』三二八、三六二—三頁、澤田瑞穂『佛教と中国文学』国書刊行会、一九七五年、一二七—三三頁、などに

よる。『南海観音全伝』の全文は、沈伝鳳校注『南海観音全伝・達磨出世伝燈伝』（三民書局、二〇〇八年）で読める。プロットは『香山宝卷』によく似ているが、とくに後半にメインのプロットとは関連性の薄い挿話がいくつか追加されて冗長になっている。

- (14) 原文としては、「乾隆版香山宝卷（吉岡蔵）」として『吉岡義豊著作集』第四卷にある。また英語訳もある。Witt L. Idema, *Personal Salvation and Filial Piety: Two Precious Scroll Narratives of Guanyin and Her Acolytes*, University of Hawaii Press, 2008. なお、日本に〈妙善説話〉が伝わった形跡は、今の所、見つからない。しかし、『熊野の本地』と『厳島縁起』にみられる、頸を切られた妃が我が子を哺乳して（あるいは首から甘露がでて）育て最後には仏になるというプロットは、追放された女が頸を切られながらも蘇って女神になるという点で〈妙善説話〉と本質的な類似性を思わせるし、〈中将姫〉は、親に捨てられた貴種である娘が独身のまま仏たちに守られて成仏する、という点で〈妙善説話〉に似ている。これらの物語の相互関係は不明だが、東アジアには自己犠牲的な苦しむ女が成仏する物語が広く行われていたことが推測される。なお、〈妙善説話〉の日本語訳は見当たらない。しかし、周兆昌『観世音菩薩伝』（東宣出版、二〇〇六年）という日本語の本があつて、内容は明らかに〈妙善説話〉であるが、この翻訳がどのテキストに基づくのか、どの程度作者の裁量で書かれているのか、よくわからない。

- (15) 合山究『明清時代の女性と文学』汲古書院、二〇〇六年。

- (16) 『観音』三六七―八頁。相田洋『異人と市…境界の中国古代史』研文出版、一九九七年、二八二―三〇三頁。

- (17) ニーチェ（木場深定訳）『道徳の系譜（改版）』岩波文庫、一九六四年、五〇頁。

- (18) 拙稿「皇帝を殺す―中国における至高者を殺害する物語についての予備的研究―」『京都学園大学経済学部論集』二十三卷一号、二〇一三年、「白蛇伝」にみる近代の胎動、『京都学園大学経済学部論集』二十三卷二号、二〇一四年。集権的な国家秩序の形成に対応して、ルサンチマン的な復讐の物語が盛んになることは、近世の日本にも顕著に見られる現象であつて、その代表が人形浄瑠璃・歌舞伎において十八世紀初頭に流行する〈曾我兄弟〉であり〈忠臣蔵〉である。拙著『隠された国家―近世演劇にみる心の歴史―』世界思想社、二〇〇六年。



- (19) *Personal Salvation and Filial Piety*, p26.
- (20) 「皇帝を殺す」
- (21) これは、大筋は目連伝でありながら、本来は異なる物語を複数繰りこんでいて、そのなかに妙善説話もある。『湖南省瀘溪県辰河高腔目連全伝』施合鄭民俗文化基金会(台北)、一九九九年。
- (22) 『中国女神の宇宙』四六八―七〇頁。
- (23) 徳永彩理「宝巻による「割股療親」孝行の推進について」山口大学アジア歴史・文化研究会『アジアの歴史と文化』十二巻、二〇〇八年。
- (24) 『観音』三四三―九頁。
- (25) *Personal Salvation and Filial Piety*, pp29-30.
- (26) 須藤訓任訳「小箱選びのモチーフ」『フロイト全集』十二巻、岩波書店、二〇〇九年。『リア王』と〈妙善説話〉の類似性については、*The Legend of Miaoshan* にも指摘がある。
- (27) 須藤訓任訳「快原理の彼岸」『フロイト全集』十七巻、岩波書店、二〇〇六年。
- (28) 澤田瑞穂『佛教と中国文学』国書刊行会、一九七五年、『観音変容譚』三八九―四〇六頁。
- (29) 拙稿「目連救母の精神史―中国文明における母殺しの彼岸―」京都学園大学人間文化学会編『人間文化研究』三八号、二〇一七年。
- (30) 『観音変容譚』二七八―九一頁。
- (31) 類話は他の地域にも広くみられ、日本では「蛇婿」などとして伝承されているし、また欧州では、蛇ではなく蛙が実は王さまで、といった話がよく知られている。楊静芳「中日昔話における蛇婿の比較―「蛇婿と姉妹型」を中心に―」日本口承文藝学会『口承文藝研究』三七号、二〇一四年。
- (32) 隣国の朝鮮には、〈妙善説話〉によく似た話として、〈バリ公主神話〉がある。あるヴァージョンによれば、王に捨てられた、七人姉妹の末娘が重い病になった両親を救う物語であるが、この主人公には妙善のような禁欲性がなくて、

神秘的な男と結婚して七人もの息子を産んでいるので、やはり性愛的な幸福をもって結末としている。金香淑『朝鮮の口伝神話―「バリ公主神話」集』和泉書院、一九九八年。

- (33) ちなみに、日本では、補陀落渡海といって観音信仰が自殺と結びつくことすらあつて、そのタナトス性があからさまである。なお、「補陀落渡海は日本特有の宗教現象」(根井浄『補陀落渡海史』法蔵館、二〇〇一年、三頁)であるらしい。

- (34) 『観音変容譚』三〇七―二二頁。

- (35) 『中国女神の宇宙』四七―四頁。原書が二〇〇〇年に出版されたこの本では、現在も続く風習の話としても語られている。

- (36) 「小箱選びのモティーフ」三〇三頁。

- (37) 『観音』三六六頁。

- (38) 「観音得道」『中国民間故事全書 上海・黄浦卷』上巻、知識産権出版社(北京)、二〇一一年、「千手観音」『中国民間故事全書 上海・虹口卷』上巻、知識産権出版社(北京)、二〇一一年、「千手千眼佛の来歴」『中国民間故事全書 河北・高碑店巻』知識産権出版社(北京)、二〇一一年、「千手千眼佛の来歴」『中国民間故事全書 二四巻 河南民間故事集』遠流出版(台北)、一九九四年、「千手千脚娘の由来」『中国民間故事全集 二十一巻 安徽民間故事集』遠流出版(台北)、一九九四年、など。

- (39) よく知られているうえに傍証にすぎないが、十六世紀ころから福建省などで多く作られた白磁製の子供を抱いた観音像が日本にもたらされて、その一部が長崎の隠れキリシタンたちによって信仰されていた。限られた選択肢であったのだから、彼らにとってマリアのイメージを重ねる対象として中国の女性化した母親化した観音像がもつとも相応しかった、ということであろう。若桑みどり『聖母像の到来』青土社、二〇〇八年、沈薇薇「マリア観音と天草の隠れキリシタン信仰―サンタ・マリア館所蔵資料を中心に」『関西大学文化交渉学教育研究拠点「天草諸島の文化交渉研究」二〇一一年。

(40)

なお、先にもふれたように、日本列島では女神信仰は盛んではなかったが、その代わりに、近世中国における女神信仰と機能的に平行関係にあるものとして、一つには阿弥陀信仰を挙げられるだろう。モーリス・パンゲは『自死の日本史』において、次のように言っている。「日本の阿弥陀信仰と同時代の十二・三世紀、ヨーロッパにもマリア信仰が存在していたが、アブラハムに始まり、聖アウグスティヌスからキルケゴールに至る宗教思想の根本にあるのは厳しい父親の幻想的イメージではないだろうか。全西欧文明は十七世紀に至るまで「神の怒り」に対する不安のなかで生きてきた。一方、阿弥陀信仰においては、慈悲の菩薩、観音（インド名アヴローキテーシュヴァラ）の女性的な姿形のうちに、寛大で優しい慈母のイメージを見出すことができる。このイメージは子供たちの養育を通じて日本的オイディプスのなかに書きこまれていくものだ。だが阿弥陀の救いがキリストのように犠牲を伴っていないというわけではない。」（竹内信夫訳、筑摩書房、一九八六年、一七〇頁）。阿弥陀信仰は、とくに真宗においてその核心となっていて、阿弥陀仏があるがままの人間を救済するとしている。真宗は女神像はもちろんどんな仏像も祀らないが、阿弥陀を「親様」と呼び習わすその信仰のかたちには、近世中国における観音をはじめとする女神信仰と相通じるものがあるように思われる。

